

# 2012年マアジ

単位：数量、1000トン、価格、円/kg

年	数 量									価 格						ムロ	アジ			
	漁獲	養殖	産地	輸 入	東京			消費支出 生(%)	在 庫	加工 塩干	産 地	輸 入	東京					消費支出 生(円)	漁 獲	産 地
					生鮮	冷凍	塩干						生鮮	冷凍	塩干					
23	168	1.1	119.2	32.3	18.4	0.5	9.3	1,424	30.2	43.1	162	146	468	331	447	1,355	25.1	18.1		
24	134	1.1	94.0	35.6	16.0	0.4	8.7	1,211	31.6	39.0	192	158	535	473	448	1,233	22.6	16.5		
%	79	101	79	110	87	85	93	85	104	91	119	108	114	143	100	91	90	91		

## 漁獲量と資源

24年の漁獲量は13.4万トンで、前年(16.7万トン)を下回り、平成11年以降の平均20万～25万トン台を本年も引続き下回る低水準であった。

本年は、主力の東シナ海、山陰沿岸とも低調な水揚げであった結果、前年を下回った。

主力の東シナ海及び日本海沿岸で主に漁獲される対馬暖流系群の資源量は、1970年代後半に低い水準であったが、その後増加傾向を示し、1993～1998年には、50万～54万トンの高い水準を維持した。1999年以降はそれよりやや低く、2001年は28万トンに減少したが、その後増加して、2004年は55万トンであった。2005年以降は同水準を保ち、2011年は52万トンであった。再生産成功率は、1990～2000年には変動しながら減少傾向を示したが、2001年に急増した。その後は再び減少傾向を示し、2005～2007年はかなり低い値となったが、2008年以降は上向いた。親魚量と加入量には正の相関があり、親魚量が少ない年には高い加入量が出現しない傾向がある、といわれている。

また太平洋系群の資源量は1990年代はじめまで増加し、高位水準になったが、1996年の16万トンを頂点として減少し、その後2000年と2001年は増加したものの、2004年以降は再び減少傾向となり、2011年は5.5万トンと推定された。親魚量は1984年以降増加し、1992年に最高の6.4万トンとなった後5万トン前後で推移したが、2001年以降は連続して減少し、2011年は2.1万トンと推定されている。

以上のように資源水準は中位であるがその動向は、太平洋系群は減少傾向にあるが、対馬暖流系群は、増加傾向にある、といわれている。

## ムロアジ類

大中型まき網のマルアジの資源密度指数は、増減を繰り返しながらも長期的には減少傾向で推移しており、近年では低い水準にある。マルアジを除くムロアジ類の資源密度指数は1990年代前半までは増減を繰り返しながら推移してきたが、1990年代後半に減少し、2000年代前半にかけて低い水準となった。その後、2006～2008年にかけて増加傾向が認められたが、2009・2010年には再び減少した。2011年は2010年から微増した。マルアジおよびムロアジ類(マルアジ除く)の資源密度指数の相乗平均値は過去約40年間でみると低い水準にあり、最近5年間(2007～2011年)では減少傾向で推移している、といわれている。(近年MAX: 1990年 10.9万トン)

## 産地水揚量と価格（４２港）

単位：数量、1000トン、価格、円/kg

海域別水揚量				月別漁獲量				月別価格推移			
海域	23年	24年	前年比	月	23年	24年	前年比	月	23年	24年	前年比
東シナ海	71.6	53.6	75	1	5.93	9.78	165	1	158	122	77
山陰	38.0	33.4	88	2	8.13	8.55	105	2	137	149	109
豊後水道	0.4	0.5	116	3	8.72	10.65	122	3	167	155	93
九州東岸	2.5	1.3	53	4	11.11	6.71	60	4	182	234	129
薩南	1.3	1.1	85	5	12.03	14.78	123	5	158	161	102
太平洋	3.7	2.0	54	6	5.64	7.46	132	6	267	263	98
その他日本海	1.1	1.9	173	7	10.32	7.31	71	7	218	256	117
	118.6	93.7	79	8	11.48	5.43	47	8	211	285	135
				9	8.79	5.17	59	9	177	242	137
				10	13.16	5.91	45	10	119	199	167
				11	12.89	7.87	61	11	104	158	152
				12	10.69	4.32	40	12	107	202	189
				計	118.89	93.95	79	年平均	162	192	119

24年のマアジの水揚量は、9.4万トンで前年（11.9万トン）を下回った。

九州西方海域では、春の盛漁期（4～6月）に唯一5月にまとまった漁獲があったのみで昨年を下回る漁であった。その後夏場以降下半期にも目立った漁獲はなく、秋口から冬場にもピークがみられず、その結果年間水揚げは前年をかなり下回った。

また、山陰沿岸では春の盛漁期（4～6月）に昨年と比べると好調な漁況であったため、昨年を上回る水揚げがみられた。しかし秋漁からの下半期に一転低調に陥り水揚げを伸ばすことなく、結果的には今年も昨年を下回る水揚げとなった。

太平洋側では薩南海域も含め、東海海域を含む太平洋側で漁獲が引き続きかなり減少した。

山陰沿岸では、依然、魚体の大きいマアジは少なく本年も周年豆アジ（0～1歳魚）主体で推移し、餌に廻る割合が多く、依然型の大きいアジは少なかった。

価格は、192円でほぼ前年（162円）並で推移した。

## 輸 入

24年のアジの輸入は、3.6万トンで近年の5～7万トンの範囲を依然かなり下回る水準であり漸減傾向が続いているが、前年（3.2万トン）をやや上回った。

本年は、オランダ0.7万トン（前年：1.1万トン）、アイルランド0.7万トン（前年：0.09万トン）ノルウェー0.6万トン（前年：0.7万トン）で主力のオランダ、ノルウェーは引続き減少し、アイルランドが大幅に増加したのが特徴。また韓国は0.4万トン（前年：0.3万トン）、台湾は0.1万トン（前年：0.1万トン）、中国が0.1万トンと前年（0.1万トン）で大きな変化はなかった。

価格は、158円で前年（146円）を若干上回った。

## 在 庫 量

本年の在庫量は、3.2万トンと前年（3万トン）を若干上回った。

これは、国内生産の減少を輸入の増加で相殺した結果である。

## 消費地入荷量と価格

24年の東京消費地の入荷量は、生1.6万トン（前年：1.8万トン）、冷0.4千トン（前年：0.5千トン）、塩干物は0.9万トンで前年（0.9万トン）を何れも下回ったのが特徴である。

本年の1世帯あたりの消費支出も本年は数量、金額とも減少がみられ、消費地市場の減少を反映している。

価格は、生535円（前年：468円）、冷473円（前年：331円）、塩干448円（前年：447円）で、円環を除きいずれも扱いの減少を反映し、上昇した。